

(薩摩郡下甌村大字手打字大原・宮園)

位置と環境

本遺跡は、甌島列島にある下甌村の中心集落手打のほぼ中央に位置にある。

甌島列島は、北から上甌島、中甌島、下甌島で構成され、下甌村は最も南の島に位置する。手打村の中心地は、下甌島でも南にあり、南に開いた手打湾の奥地は砂丘を形成し集落がある。

砂丘は第一砂丘と第二砂丘があり、その間は水田となっている。第一砂丘は山地側で海岸より約300m奥に小規模で形成され古砂丘と呼ばれている。第二砂丘は海岸より150m奥に形成され新砂丘と呼ばれている。集落は両砂丘に営まれて、遺跡は、新砂丘の後側にある。

調査の経緯

下甌村教育委員会は、郷土史編纂の一環として、村内の文化財について予備調査をすすめるため県教育委員会に調査依頼をした。その結果、手打貝塚のほか字大原・宮園地区に遺物の広がりがあることが確認された。その上、県道手打―蘭牟田港線の新設計画で、この地区を横断することがわかりその対策が急がれた。昭和47年1月16日分布調査をして、本遺跡は第二砂丘上の100m余に及ぶ遺跡であることが確認された。

一方、県道建設において約800㎡が工事対象面積であることで、下甌村教育委員会と県土木部が協議した。その結果、本調査を実施する運びとなった。

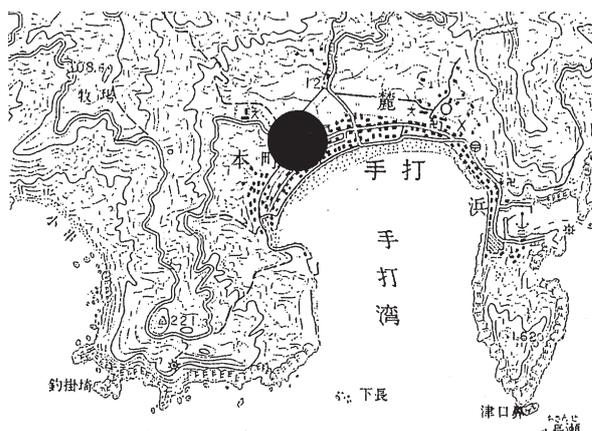
発掘調査は昭和48年10月1日から29日まで実施した。

遺構と遺物

地層は、I層が表土層で黝褐色砂層、II層が黒褐色砂層、第III層が茶褐色砂層、IV層が黄褐色砂層である。この中で、包含層はII層であり、遺構検出面はIII層である。

遺構は、IV区15グリッド中央部に縦165cm、横さ5cmの隅丸長方形の竪穴を検出した。遺構の東角、南角、北角に30～40cm前後の礫を配置している。

なお、南側中央部には丹が塗られた礫が配置され



第1図 大原・宮園遺跡の位置

ていた。中には甕の破片が東部に集中し、小礫も出土している。これらから判断すると性格は、埋葬遺構である。

壺棺葬

IV区9グリッド北部のIII層から検出されている。この壺棺は、3個体の壺で構成されている。本棺は器高34cm、頸直径12cm、胴直径28cmであり、二重口縁と一本の蒲鉾形凸帯を持ち尖底に近い丸底である。ほかの2個体は被覆や補強に使用されている。出土状況は口縁部が北北東にあり、胴部は、片面が割られ、後から被した状況である。

中には、嬰兒人骨が一体完全な状態で埋葬されていた。頭は東に向けられていた。

また、埋葬によく見られる穿孔は底部近くにある。

遺物

土器は古墳時代の成川式土器の甕形土器・壺形土器・高坏、須恵器の坏・蓋・甕、土師器の高坏・坏・壺が出土している。

特徴

この遺跡で埋葬である配石遺構、壺棺の発見が古墳時代の葬制として共同墓地の性格が確認された。

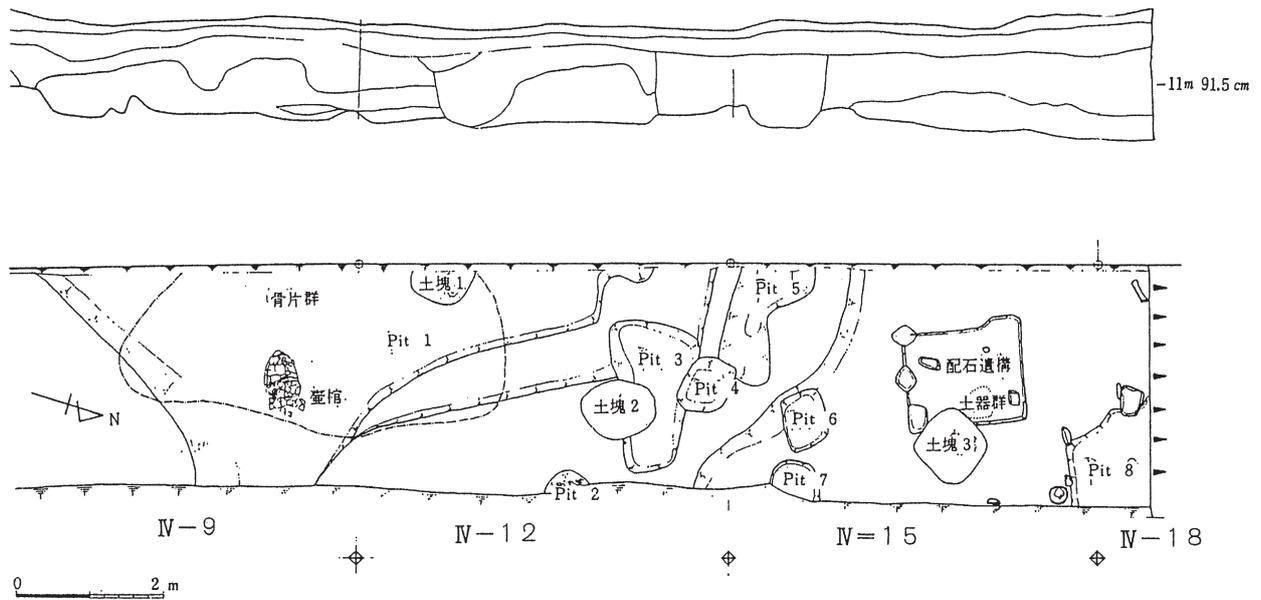
資料の存在

出土遺物は、下甌村教育委員会に保管されている。

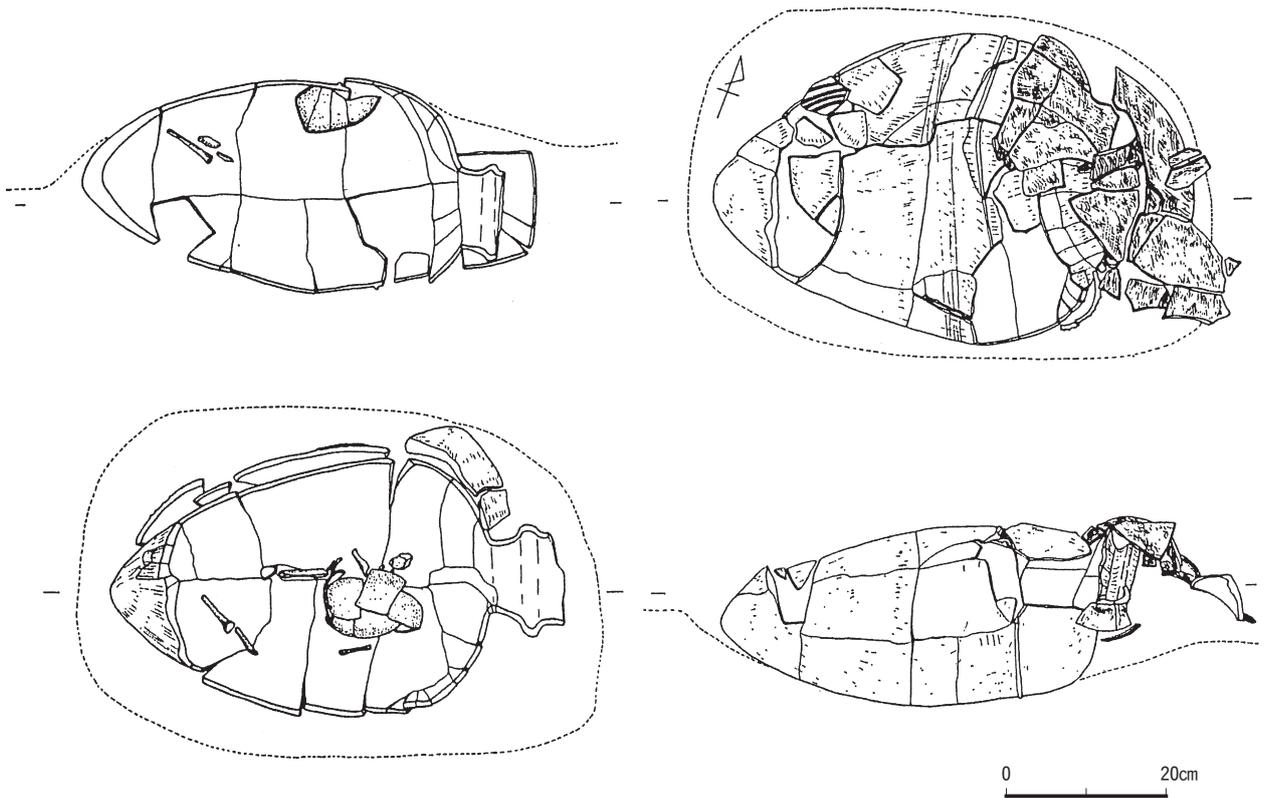
参考文献

下甌村教育委員会1974「大原・宮園遺跡」『下甌村埋蔵文化財発掘調査報告書』1

(彌榮久志)



第2図 大原・宮藪遺跡の遺構



第3図 大原・宮藪遺跡の壺棺